

至福なる童貞女よ、爾は大なる山、ハリストスの其中に入りたる者と現れたり、神聖なるダヴィドの呼ぶが如し、我等は子たる神を以て之に由りて天に升るを得たり。

我等の神よ、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

神性の帝 笏たる十字架、軍士、勇力よ、我等爾を待みて、戦ふ者を畏れず、爾に伏拝する我等に常に諸敵に勝つを得しめ給へ。

(詠) イルモス1調 「嗚呼、母童貞女、真の生神女、種なくハリストス我が神、身にて十字架に擧げられし主を生みし者や、我等信者皆宜しきに合ひて今爾を彼と偕に崇め讃む。」

第1歌 第1調

嗚呼、母童貞女、真の生神女、
たねなくハリストス わが 身にて十字架に擧げられし
主を生みしものや、われら信者みな宜しきに
かないて 今爾を彼と ともに あがめほむ。

常に福にして (6調)

小連禱

エクサポステラリー

誦経 至尊なる木は齋の中節に於いて凡そ己の苦難を以て宜しきに合いてハリストスの苦難に従ふ者を伏拝の爲に招く。信者よ、皆来たりて、畏るべき奥密の木に伏拝せん。

十字架生神女讃詞

誦経 聘女ならぬ聘女、純潔なる神言の母は嘆きて呼べり、子よ、ガウリイルが我に携へし福音の喜びは此くの如きか。言い難き旨及び神聖なる定制を成就せん爲に往き給へ。

をいや醫さんと欲したればなりと、生神女は泣きて言えり。

イルモス6調「生神女よ爾の位に合わせて能く爾を讚美する舌なし」省略

第9歌頌

以てあわれみ矜恤を我が先祖すなわちに施し、其聖なる約すなわち即すなわち我が祖アウラアムちかに矢ひたる誓を記念せん、
十字架よ、昔エリセイは木を以て斧を河より引き出して、爾生命を施す木を示せり、
蓋ハリストスは爾ていの上に釘せられて、此これを以て諸民を偶像ふかみの邪教いだの深處より引き出し給へり。故に我等爾に伏拝して彼の権能を讚榮す。

謂ふ、我等に我が諸敵の手より救はれし後、懼おそれなく、彼の前に在りて、聖を以て、義を以て、生涯つか彼に事へしめんと。

救世主よ、爾の釘せらるるに因りて日の光線はくらやみ黒暗と爲り、月の光は消え、五行は戦へんきて變じたり。故に我爾に呼ぶ、言よ、諸慾くらやみの暗昧に因りて變じたる吾が思を爾の手を以て變易へんえきし、之を照らして我を救ひ給へ。

子よ、爾も至上者の預言者ととな称へられん、蓋主の面前に行きて其の道を備へん、
ハリストスよ、爾の創傷を以て吾がきず靈たましいの慾を醫し、爾の脅の刺さるるを以て悪鬼の傷よくましく我を刺す止め、爾の釘を以て我が逸樂の欲望を釘うちて、我に無慾にして爾の尊くるしみきく苦くと復活とに伏拝するを得しめ給へ。

彼の民に、其救はすなわち即すなわち諸罪の赦ゆるしにして、我が神の矜恤あわれみに因ることを知らしめん。
救世主よ、美うるわしき童貞女は爾人の子より美うるわしき者を生みたりしに、爾がくるしみ苦くの解みげえき華麗もなく華榮もなきを見て、泣きて言へり、吾が子よ、我爾が智慧に超ゆる謙遜を奇とす、爾は此を以てこれ謙へりくだる人の性を救ひ給ふ。

此の矜恤あわれみに因りて、東旭あさひは上より我等に臨めり、

パスハのイルモス1調「新たなるイエルサリムよ光光れよ、」省略

神の衆民よ、光潔なる心を以て来たりて、前に置かれたる十字架を見、おそれ畏おそれを以て之に接吻し、喜を抱きて其上あに擧げられし光榮の主を常に讚榮せよ。

幽暗と死の蔭くらやみとに坐する者を照し、我等の足を平安の道に向はしめん為なり。

十字架よ、爾は我が生命の神聖なる器なり、主宰は爾の上に升りて、我を救はん爲に脅わきを刺されて、血と水とを流し給へり、我よろこび喜うを領けて、彼を讚榮す。

光榮は父と子と聖神のぼに帰す

聖なる神よ。我は爾位の三者性の唯一者、父、子聖神ゆいいち、唯一の原始、唯一の国、萬有を宰制する主に伏拝す。

今も何時も世々に、「アミン」

第2句 その婢の卑しきをかえり願み給へり、今よりよろずよ萬世我を福なりと言はん、

→附唱 **ヘルビムより尊く**

第3句 権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、其の名は聖なり、其の憐れみは世世 彼を畏るる者に臨まん →附唱 **ヘルビムより尊く**

第4句 其の肘の力を表して、心の驕れるものを散らし給へり、→附唱 **ヘルビムより尊く**

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなしく帰らせ給へり。 →附唱 **ヘルビムより尊く**

第6句 其の僕、イズライリを納れて、我が先祖に告げしが如く、アウラアムと其の裔を世世に憐れむ事を記憶し給へり、 →附唱 **ヘルビムより尊く**

第9歌頌

(詠) イルモス4調「凡そ地に生まるる者は聖神[°]に照らされて楽しみ、形なき智慧の性も祝い、神の母の聖なる祭を尊みて呼ぶべし、至りて福なる潔き生神女、永貞童女よ、喜べよ。」

第9歌頌 4調

凡そ地に生まるるものは、聖神に照らされて楽しみ、
形なき 智慧ちえの性も いわい 神の母の聖なる祭を尊みて呼ぶ
べし、至さいわいって福なる潔き生神女、永貞童女やよろこべよ。

至尊なる木に伏拝せん。

人を愛する主よ、爾はほこ戈わきに由りて爾の脅を開きて、我の爲に赦罪の泉を流し、地の中に木の上に釘せられて、木を以て定罪を止め給へり。我等今 齋ものいみの半ばに之に接吻して、爾の仁慈ほを讃め歌ふ。

至尊なる木に伏拝せん。

生いのちを施す十字架伏拝の今日、愛を以て山は甘味を、岡は喜かんみ悦よろこびを 滴したたらせよ、主の樹はくこうぼくリワンの柏香木は祝へ、預言者、致命者、使徒、及び義者の 靈たましいは慶賀せよ。

至尊なる木に伏拝せん。

主よ、畏おそれを以て爾を歌ふ爾の民及び嗣業しぎょう、爾が甘んじて彼等の爲に死を忍びし所の者を願み給へ、願くは我等の悪の無量の多きは爾の慈憐じれんに勝たざらん。至仁なる主よ、爾の十字架を以て、我等衆を救ひ給へ、爾は人を愛する主なればなり。

光榮は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も世々にアミン。

ハリストスよ、爾は釘せられて己の瞬きを以て見ゆる世界を動かせども、懸かかかれる者として止まれり、始めて作られし者の慾よくの念おもいを滅いたみぼし、爾の仁慈を以て其損傷

我等の神よ、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

こ
斯の至聖なる木、昔預言者イエレミヤの預見せし、如く、イズライリ人がハリストス
を害せん爲に設けられたる者は尊まるべし。我等此を世々に讃め揚げん。

(詠) 我等主を讃め、崇め、伏し拝みて世々に歌ひ讃めん、

(詠) イルモス 1調 「昔獅子の穴に投げられたる預言者の中に大いなるダニイル十字形
に手を伸べて、其口に 残はるるなく救はれて、ハリストス神を世に崇め讃む。」

我等神を崇め讃め、伏し拝みて 世々にうたい 讃めん

第8 歌頌 - 2 1 調

むかし 獅子の 穴に 投げられたる預言者の うー ちに

大いなる ダニイル十字形に手を のべて 其のくちに

そこなわるるなく すくわれて、 ハリストス神 を世々に

あがめ 讃 む。

司祭 生神女光の母を讃歌を以て讃め揚げん。

(詠) [ヘルビムの歌]

第1句 我が心は主を崇め、我が靈は神我が救主を悦ぶ。

附唱 ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操を破らずして神言を生
みし、実の生神女たる爾を崇め讃む。

第1句

我が心は主を あがめ 我が靈は神我が救主を 喜こーぶ

附唱

ヘルビムより 尊とく セラフィムに並びなく さかえ 貞操を

破らずして神言を 生みし 実の生神女たる 爾をあがめ 讃 む

天の諸の位鳥、野獸と一切の家畜と主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、
 洪恩なる主よ、爾は甘んじて地の中に日中に釘せられて、地の四極の蛇の口の中より
 引き出し給へり。故に我等は神聖なる齋の中の週間に爾の尊き十字架に伏拝し
 て、之を讃榮して呼ぶ、主を歌ひて、世々に崇め讃めよ。

人の諸子は主を崇め讃めよ、イスライリ民は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、
 歡喜の記號、勝たれぬ武器、教会の牆、致命者の譽れ、使徒の飾り、司祭首の固よ、
 我が弱りたる靈を堅めて、爾に伏拝して呼ぶを得しめよ、造物は主を歌ひて、萬
 世に崇め讃めよ。

主の司祭等、主の諸僕は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、
 恒忍なる主よ、我定罪に當るものは爾の偏頗なき審判を我が思念の中に入るとき、
 嘆きて泣く。故に我を宥めて、吾が靈の重き任を軽くし給へ、我が歡びて呼ばん
 爲なり、造物は主を歌ひて、萬世に崇め讃めよ。

諸神[°]と諸聖人の靈と、諸義人と心の謙卑なる者と主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々
 に讃め揚げよ、
 純潔なる童貞女よ、棘は智慧に超ゆる爾の産の奥密を預象せり、蓋此の如く、爾
 は焚かるるなく止まりて、火なるハリストス救世主、十字架に擧げられし者を生み給
 へり。彼に我を永遠の火より救はんことを祈り給へ。蓋我呼ぶ、造物は主を歌ひて、
 萬世に崇め讃めよ。

アナニヤ、アザリヤ、ミサイルは主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、
 パスハのイルモス 「この撰ばれたる聖なる日は」省略
 来たりて、齋に潔められて前に置かれたる主の十字架に愛を以て接吻せん、蓋此は
 我等のために成聖と能力との寶なり。故に我等此を世々に歌はん。

主の諸使徒、預言者、致命者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、
 斯の三合格の十字架は小さく見ゆれども、その力は天に戻りて、常に人々を神に升す。
 我等此を以てハリストスを世々に崇め讃めん。

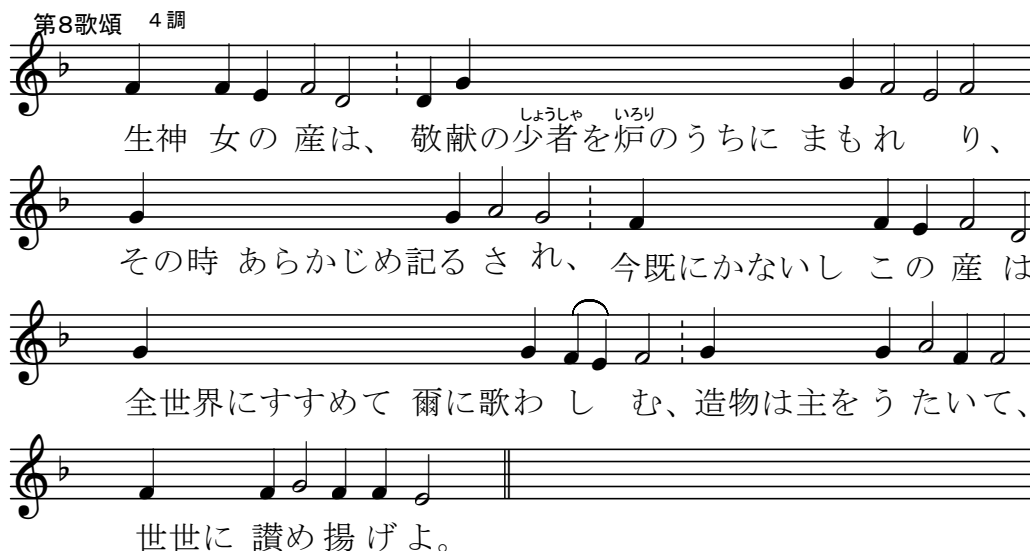
我等主なる父と子と聖神[°]とを崇め讃めん。
 我三の本質の中に唯一の神性を讃榮して、三位を一に混淆せず、又神性を分かつ
 ず、蓋父、子、及び聖神[°]は三位にして唯一なる神、萬有の上にある主なり。

今も何時も世々に、「アミン」

童貞女、神の聘女マリヤよ、爾は母の中に獨の者と現れて、童貞の印を守りて、夫
 なくハリストス救世主を生み給へり。我等信者は世々に爾を讃揚す。

(詠) イルモス 4 調「生神女の産は敬虔の少者を爐の中に守れり、その時に預め徴され、今已に應ひし此の産は全世界に勧めて爾に歌はしむ、造物は主を歌ひて、萬世に彼を讃め揚げよ」

第8歌頌 4 調



生神 女の 産は、 敬献しょうしゃの少者いろりを炉のうちに まもれ り、
 その時 あらかじめ記る され、 今既にかないし この 産は
 全世界にすすめて 爾に歌わ し む、造物は主をうたいて、
 世世に 讃め 揚げよ。

至尊なる木に伏拝せん。

主よ、爾は木の上に手を舒べて、不摂生のの手の罪を解き、戈ほこにて刺されて、此これを以て敵に傷つけ、膽いを嘗めて、逸楽いつらくの悪を除き、醯すを飲ませられて、衆あたに楽しみを與へ給へり。

至尊なる木に伏拝せん。

我等 潔いさぎよき智慧ちえと良心よろことを以て 欣ばしく近づきて伏拝せん、聖なる尊き木は前に置かる、ハリストスこれは此に由りて恥づべき死を受けて、罪犯に由りて甚しく辱かしめられたる者に最上の尊貴を被らせ給へり。

至尊なる木に伏拝せん。

我罪の木にて殺され、逸楽しよくの嗜慾にて葬られたり。主よ、我を活かし、我臥す者しよくを起こして、爾の 苦くるしみに伏拝する者、神聖なる復活に與る者、爾を愛する聖者の嗣業しぎょうに分ある者と爲し給へ。

光榮は父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世々にアミン。

独生の子よ、我は肉體を取りし爾を人の諸子うるわより最美うらわしき者と知れり、爾が釘せられしを見るに、華麗もなく、華榮みばえもなし、衆人の救なる者よ、爾の光榮あらわを顯し給へと、純潔なる童貞女は呼べり。

イルモス 6 調「福たる少者はバビロンに於いて先祖の律の爲に」省略

第 8 歌頌

ほろび
スス萬軍の王よ、我を淪滅より救ひ給へ。」(楽譜同上)

小連禱

コンダク 7 調

ほのお 燄の剣はエデムの門を守らず、蓋之を 卸くる至栄なる十字架の木は至れり。
はり 死の刺及び地獄の勝は亡びたり、蓋爾は、吾が救世主よ、現れて、地獄に在る
また 者に呼べり、復樂園に入れ。

第 7 歌頌

(詠) イルモス 4 調 「敬虔の者は造物主に易へて造物に事ふることをせざりき、火の嚇しを勇ましく踏みて、喜び歌へり、讚美たる主、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる」

第 7 歌頌 4 調



敬虔の者は造物主にかえて、造物につかえず、
火の脅しを勇ましく踏みて慶びうたえり、
讚美たる主先祖のかみや、爾は崇め讃めらる。

至尊なる木に伏拝せん。

ハリストスよ、エリセイがイオルダンより出しし斧は十字架を示せり、爾は此を以て諸民を空虚の深處より引き出して、歌はしむ、主先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

至尊なる木に伏拝せん。

十字架よ、天の者は地の者と偕に爾に伏拝するを喜ぶ、蓋爾に由り諸天使と人々とは合わせられて呼ぶ、主神よ、爾は崇め讃めらる。

至尊なる木に伏拝せん。

我等は松の如く矜恤、杉の如く馨しき信、黄楊の如く真の愛を獻じて、主の十字架に伏拝し、其上に釘せられし贖罪主を崇め讃めん。

右 光栄は父と子と聖神^ろに帰す、今も何時も世々にアミン。

神の選びたる城邑よ、神は天の者を動かさずして爾の腹に入りたり、十字架に懸りて造物を動かし給へり。我が彼の動かざる石の上に常に立たん爲に彼に祈り給へ。

第 8 歌頌

なる主なればなり。

光荣は父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世々にアミン。

熟したる葡萄の房よ、如何ぞ爾木に懸りたる、光荣の日、爾の^{かか}苦^{くるしみ}にて日の光を晦ま
しし者よ、如何ぞ没したると、救世主よ、爾を生みし牝羊は昔母として哭きて爾に呼
べり。

第6歌頌

(詠) イルモス 4 調「三日の葬りを預象^{よしょう}するイオナは鯨の中に在りて祈りて籲^よべり、イイス
ス萬軍の王よ、我等を淪滅より救ひ給へ。」

第6歌頌 4 調

三日の葬りを預象^{よしょう}するイオナは、鯨の腹のうちにありて
祈りて言えり、イイスス萬軍^{ばんぐん}の主よ、
我を滅びより救いたまえ。

至尊なる木に伏拝せん。

主の最尊き十字架よ、爾は建てられて地獄^{すまい}の居處を震わせ、信者の爲に動かされぬ
防固^{かため}なるおおひと爲れり。

至尊なる木に伏拝せん。

我等は諸徳^みの果を結び者と爲りて、神聖なる木の生を施す果^み、其上に伸べられしイイ
スス、豊かに實れる葡萄樹^{ぶどうじゅ}たる主の生ぜし者を摘まん。

至尊なる木に伏拝せん。

イイススよ、我等は爾の多くの仁慈を歌ひて、爾の十字架と、戈^{ほこ}と、葦^{あし}とに伏拝す、
蓋爾は、洪恩^{こうおん}なる主よ、此等^{これ}を以て仇の隔ての墻^{かき}を毀ち給へり。

光荣は父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世々にアミン。

至浄なる者は爾を活ける水の川として生じたり、蓋、爾は我等の更新^{あらため}の泉として、
十字架に伸べられて、救^{ながれ}の流を注ぎ給へり。

(詠) イルモス 4 調「三日の葬を預象^{よしょう}する預言者イオナは鯨の中に在りて祈りて籲^よべり、イイ

至尊なる木に伏拝せん。

昔光栄なるイアコフは手を又へ伸べて、十字架の形を^{しる}兆し、孫に祝福して、我等衆に至る所の救の祝福を^{しる}兆せり。

至尊なる木に伏拝せん。

我等は十字架の印に^{いん}護られ、其我等の前に置かるる者に^{たましい}靈の喜びを以て接吻し、害を爲す肉欲を殺して、救の^{くるしみ}苦に往かん。

至尊なる木に伏拝せん。

最と尊き十字架よ、我等爾を救の^{うつわ}器、勝たれぬ^{はた}旂、^{よろこび}歡喜の^{しるし}徴、死の殺されたる武器として^{いだ}抱きて、爾の上に^{てい}釘せられし主の光栄を以て飾らる。

光栄は父と子と聖神^{*}に帰す、今も何時も世々にアミン。

我に見らるるイイスス吾が子、我より身を取りし者よ、爾は諸天使に近づき難き者として見られたり、今我爾が木に釘せられしを見て^{てい}哭くと、ハリストスの母は^な云へり。

第5歌頌

(詠) イルモス4調「萬物は爾が神妙の光栄に驚かざるなし、爾婚配を識らざる童貞女は至上の神を孕み、永遠の子を生みて、凡そ爾を歌ふ者に平安を給へばなり。」

第5歌頌 4 調

萬物は 爾が神妙の光栄に 驚かざる なし、爾 ^{こんばい} 婚配を知らざる

童貞女は 至上の神を は ら み、 永遠の子を生みて、

^{およ} 凡そ爾を^ほ讃め歌う者に 平安を賜えばな ー り。

至尊なる木に伏拝せん。

萬衆の生命及び救なる主よ、爾は十字架に^{てい}釘せられて死者と爲れり。故に救世主よ、我等に^{きよ}潔められたる^{たましい}靈を以て之を^{いだ}抱きて、^{くるしみ}喜びの救の^{くるしみ}苦を見るを得しめ給へ。

至尊なる木に伏拝せん。

^{いのち}生を施す木よ、無形の品位は^{つつし}敬みて爾の前に立つ、ハリストスは爾の上に其尊き^{きよ}血を流して、人類の悪鬼の汚れより^{きよ}潔め給へり。

至尊なる木に伏拝せん。

^{ことば}言よ、我敵の劍に傷つけられし者を爾の血を以て^{いや}醫し給へ。救世主よ、爾に呼ぶ、^{ほこ}戈を以て^{すみやか}速に吾が罪の^{かきつけ}書券を裂きて、我を救はれし者の書に^{しる}録し給へ、爾は^{じれん}慈憐

今日^{いひち}生を施す^{よろこび}歡喜は進めらる、皆来たりて、畏^{おそれ}を以てハリストスの尊き十字架に伏拝せん、聖神^{かみちち}を受けん爲なり。

光榮は父と子と聖神^{かみちち}に帰す。

三光線の日、三光の輝煌^{かがやき}、神父、子、及び聖神^{かみちち}、無原なる性、及び光榮よ、爾を歌う者を患難より救ひ給へ。

今も何時も世々に、「アミン」

恩寵を蒙れる讚美たる生神童貞女よ、天使の品位は爾を歌ふ、彼らとに偕に人類は今爾を聘女ならぬ聘女として讚榮す。

我等の神よ、光榮は爾に帰す、光榮は爾に帰す。

生を施す十字架よ、我爾に觸れん爲に来たりて恐れ戦く、吾が主の神聖なる血が爾の上に流されしを知ればなり。

(詠) イルモス 1調「主よ爾が敵に勝ち、世界を照らしし所の爾の十字架の力にて獲たる爾の教会を固め給へ。」

第3歌頌 - 21調

主よ、なんじが てきに 勝ち 世界を照らししところの
なんじの 十字架の ちからにて 獲たる 爾の教会を
かため たま え。

小連禱

第4歌頌

(詠) イルモス 4調「光榮の中に神性の宝座に坐するイイスス神は、軽き雲に乗るが如く、朽ちざる手に抱かれ来たりて、ハリストスよ、光榮は爾の力に帰すと呼ぶ者を救ひ給へり。」

第4歌頌

光 榮のうちに 神性の宝座に坐する イイスス かみは、
かるき雲に乗るがごとく、朽ちざるの手に抱かれ来たりて
ハリストス や、光榮は爾の力に帰すと呼ぶ者を救いたま えり。

至尊なる木に伏拝せん。

我等は 齋ものいみ の水を以て心を潔きよめて、熱信に十字架の木を抱かん。ハリストスは其の上かかに懸りて、恩主として、我等に赦罪の水を流し給へり。

至尊なる木に伏拝せん。

見よ、救いの舟は十字架の帆に進められて、齋ものいみ の半ばを過ぎたり。メシヤ・イイスス神よ、此これを以て我等を 苦くるしみ の港に送り給へ。

至尊なる木に伏拝せん。

十字架よ、モイセイは山に於いて爾を形どりて、敵の殺さるるを致せり。我等は心の中に爾を形どり、爾を見て伏拝して、爾の力を以て無形の敵に勝つ。

光栄は父と子と聖神^{*}に帰す。今も何時も世々にアミン。

我が子ハリストスよ、爾は萬有の神、及び造成主にして、甘んじて人と爲れり、今我爾かかが十字架に懸れるを見て心刺さると、爾を生みし者は言へり。

第3歌頌

イルモス「萬有の王、造物主たる者」6調 省略

彼は其の聖者の足を守る、不法の者は幽暗くらやみの中に消ゆ、

萬有の王及び造物主神よ、爾は地の中に十字架のぼに上りて、敵の悪計に因りて陥おぼりし人の性を己に升せ給へ。故に我等爾の 苦くるしみ に堅められて、熱信に爾を讚榮す。

蓋人の力を持って堅固なるに非ず、主は之に敵する者を砕かん、主は聖なり。

信者よ、我等 齋ものいみ の光にて感覺きよを潔め、十字架の無形の光線にて 盛さかんに輝かされて、其の今日前に置かるるを見て、 敬つつしみて淨き口と心とを以て接吻せん。

智者は其の智を以て誇る勿れ、強き者は其の力を以て誇る勿れ、富む者は其の富を以て誇る勿れ。

我等はハリストスの足の立ちし所に、神聖なる十字架に伏拝して吾が 靈たましいの足が神いましめの 誠みちの石に堅められて、神の恩寵に因りて其の歩みを平安の途に向かはしむるを求めん。

誇らんと欲する者は主を悟りて彼を知り、且つ地うちの中に審判と義とを行ふを以て誇るべし。

ハリストスよ、爾は夫あずかに 與たましいざる童貞女より 靈いだある肉体を取り、彼より出でて爾の十字架を以て敵を滅ぼして、朽ちたる人の性を復また新たにし給へり。故に我等爾の慈憐じれんを讚榮す。

主は天のぼに上りて 轟とどろけり、彼は義にして地はての極を審判せん。

地しきよくの四極よ、伏拝せらるる木、ハリストスが其の上かに懸けられて、悪魔を滅ぼしし所よろこびの者を見て、 歡喜の歌を奉れ。

彼は力を以て其の王に賜ひ、其あぶらの膏つつけられし者の角を高くせん。

第4週 水曜日 早課 カノン

第1のカノン4調十字架の、フェオファンの作、第2のカノン6調イオシフの作、第3のカノン1調フェオドルの作

第1歌頌

(詠) イルモス4調「我が口を開きて、聖神^oに満てられ、言を女王母に奉り、楽しみ祝ひ、喜びて其の奇蹟を歌はん」(楽譜：主日カタワシヤに同じ)

第1歌頌 4調

我が口を ひらきて、 聖一神^oに満てら ーれ、

言を女王母にたてまつり、 たのしみ いわーい、

慶びて その奇蹟を うたーわん。

至尊なる木に伏拝せん。

我等 齋^{ものいみ}に潔められて、聖なる木、ハリストスがその上に手を舒べて、敵の首領に勝ちたる者に伏拝して、讚美と光栄とを全能者に奉らん。

至尊なる木に伏拝せん。

成聖を與ふる救いの十字架は前に置かれて見らる、我等は 體^{からだ}と心とを潔めて、これに就きて、救いの恩寵を汲まん。

至尊なる木に伏拝せん。

人を愛する主よ、爾の 誠^{いましめ}の火を以て我を潔め、十字架を以て防ぎ護りて、我に爾の救いの 苦^{くるしみ}を見、愛を以て之に伏拝するを得しめ給へ。

光栄は父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世々にアミン。

人を愛する主よ、爾を生みし者は爾が十字架に擧げられしを見て、なきて呼べり、如 何ぞ 萬衆^{ばんしゅう}を審判すべき者は定罪せられ、光栄の主は懸りて見らるる。

第3歌頌

(詠) イルモス4調「生神女、生活にして盡きざる泉よ、祝ひて爾を讚め歌ふ者の靈を固め、彼等に爾が神妙なる光栄の中に栄冠を冠らしめ給へ」

第3歌頌 4調

生 神 女 生 活にして 尽きざる いずみや、

祝うて 爾を讚め歌う者の靈をかため、彼等に爾が神妙なる

光栄のうちに、 栄冠を被らせたまーえ。